

# 主張

IMF-JC議長 加藤裕治

## 転機を迎えるIMFの運動

### 特別小委員会の設置

昨年11月末、IMF（国際金庫券連）はブラジルの古都サルバドールで中央委員会を開催した。サルバドールはブラジルの北部、大西洋に面した観光都市である。16〜18世紀のスペイン統治時代の首都。美しい海岸線と世界遺産指定の中世スペインの町並で知られている。スペイン統治の頃、アフリカ大陸に一番近い海岸を持つこの街には黒人奴隷が連れて来られ売りさばかれた悲しい歴史がある。しかし黒人解放と独立のうねりもこの街から起こったのである。現代の過酷な不安定雇用をテーマとする中央委員会を開催するにはまさしくふさわしい街といえた。委員会は世界各国から不安定雇用と格差の現状が訴えられ、多くの決議が採択された。

今回の中央委員会は21世紀世界に共

通する「不安定雇用」との戦いを誓い

合ったという意味でエポックメイキングであったが、それに先立つ執行委員会ではそれ以上にIMFにとって大きな転機に繋がる重要な決定が採択された。すなわち、IMF改革作業チームとも言ふべき「特別小委員会」の設置を決めたのである。この委員会では、2009年スウェーデンで開催される第32回世界大会を自途にIMFの財政はもちろん今後の組織運営やアクションプログラムのありかた、日本が提言した地域運営のありかた、さらには他の製造系の産別組織との統合の可能性などについて多面的に検討することになっていく。委員会の設置はベーターズ会長の強い意思と北欧や日本の支持でかろうじて認められた。この委員会が何故重要でIMFの転機となり得るのか、その背景を述べてみたい。

### ITUCの結成

一昨年11月、ICFTU（国際自由労連）はWCL（国際労連）と組織統合を果たしITUC（国際労組総連合）が誕生した。これは単に組織の拡大と安定を目指した統合ではない。背景には資本の動きに対応するためより効果的な防衛戦線を構築しなければならぬとの意識が存在する。

東西冷戦が終焉し約20年、市場経済が世界に広がりグローバルゼーションが急進した。国を超えた資本の動きが加速し、国、業種をまたぐ投資やM&Aも常態化、競争が加速した。20世紀の終わりがころからはネオリベリズム政策が世界中を席卷し、労働組合運動は世界中で逆風に向き合うことになる。労働者の権利が削り取られ、不安定雇用が増加し、「底辺に向けた競争」が加速した。こうした状況に対応

するため産業別組合の統合や国際産業別組織の統合が進んだ。同時に運動のあり方も、事後対応の「抵抗型」から事前対応の「提案型、防衛型」に変わっていきつつある。たとえばWTO（世界貿易機関）への影響力行使、サミット前段でのレーバーサミット、多国籍企業へのIFA（国際枠組協約）締結の働きかけなどがそれである。ITUCの結成はそういった動きの象徴的出来事と言つてよい。

世界に張り巡らされたITという水脈を金融資本が駆け巡り、利益の極大化を目指すのであれば、労働者は連帯のグローバル化を成し遂げ、政治力を増し、有効な防衛網を築く必要がある。それには情報の共有化と資源の集約化が必要である。統合はそうした思いの具現化に他ならない。

IMFも北欧産業労連の強い要請を

受け、I C E M (国際化学エネルギー  
鉱山一般労連・二千万人)、I T G L  
W F (国際繊維被服皮革労連・一千万  
人)との組織協力、統合の可能性につ  
いて検討を約束したのである。I M F  
— J Cとしても今後精力的に意見を整  
理していきたいと考えている。

## アジアの結束

私たちは昨年6月、シンガポールで  
アジア金属労組連絡会議バイロット会  
議を開催し成功させた。金属労働運動  
の前進のため、I M Fの旗の下ではな  
く未加盟の組合も含め自主自立の精神  
をベースに連帯を強め、アジアが一団  
となってI M F運動の強化発展に参  
加、寄与していくという考え方で下準備を進めてきたものである。

参加者の多くが、I M F本部主導の  
運営、それも「抵抗型」に偏った指導  
への違和感を口にした。アジアにはア  
ジア独自の歴史・文化があり、それを  
共有できる労使であれば協力的な関係  
を築くべき事、そしてその上で産業企  
業の発展を実現し労働者の生活の向上  
を目指すという考え方は参加者の多く  
が共通して持っていた。そのためにも  
アジアという枠組みで連帯を強める必

要があることに参加者からは強い賛同  
の声が上がったのである。

この会議は、一部の国や組織で「I  
M F運動から独立していこうとする動  
き」であると誤解され問題となりかけ  
たが、昨年5月の執行委員会、10月の  
A P R E C調整委員会、11月の執行委  
員会でその趣旨を何度も説き、本部を  
はじめ他の地域からも承認を得ること  
ができた。アジアの他の主要メンバ  
ーも安堵したところである。本年6月末  
マレーシアで正式な第一回会合が開か  
れる。是非成功させI M Fの発展に繋  
げたい。

## I M F運動の進むべき道

I M Fは115年の歴史を持つ世界  
最大の国際産業別労組組織である。現  
在、154カ国、200以上の組織が  
加盟、2500万人の加盟人員を擁し  
ている。しかし運動自体については結  
成当初の中央集権的運営、抵抗型のイ  
デオロギーの強い指導が引き継がれ、  
問題提起がなされていることも事実で  
ある。

I T U CがリードするG U Fの連携  
組織「グローバルユニオン協議会」に  
はI M Fだけが未参加である。またI

T U Cのもとで地域大会が開催されて  
もI M Fには地域の決議をもとに、地  
域として参加していく組織が無いのが  
実情である。

グローバル化に対応していくために  
集約、集中は必要である。しかし、政  
治に関していうとどこの国でも中央と  
地方の比重を見ると、より地方に軸足  
を移す形で分化していく方向にあるよ  
うに、労働組合の場合にも現地で起こ  
る問題に対し現地で迅速的確に対処で  
きる自治的権限が必須であることは言  
を俟たないだろう。もつと言えば、欧  
米とアジア、アフリカでは発展の経過  
もそこで暮らす人間の文化も違う。欧  
米流の統治を押し付けても民主主義は  
根付かないことはこれまでの歴史、近  
くはアフガニスタンやイラクなどで証  
明済みである。アジアにはアジアの方  
法がある。それを自力で見出し主体的

運動を構築しない限り労働者の幸せは  
ない。

21世紀は環境と調和を図る持続ある  
発展が求められている。地球という星  
の環境は、世界が強い意思と技術を集  
約し一丸となって守っていかななくては  
ならない。しかし具体的に実施される  
対策内容は各国で違うはずである。国  
により地形も気温も自然も違うし生活  
も違うのだから。

労働運動も同じことが言える。21世  
紀は集約と分権自立が同時に求められ  
る時代なのである。I M Fの運動が正  
しい方向に進んでいくよう日本として  
も特別小委員会のメンバーとして積極  
的に役割を果たしたい。とくに本年5  
月に京都で開催される執行委員会は重  
要な位置づけとなる。成功に向け皆さ  
んのご協力をお願いしたい。



金属労協 (IMF-JC) 議長

### 加藤 裕治

かとう・ゆうじ

1951年生まれ。75年早稲田大  
学法学部卒。75年トヨタ自動車  
入社。88年トヨタ自動車労組書記  
長。92年自動車総連事務局次長。  
98年同事務局長。01年同会長  
(現職)。IMF-JC副議長。01  
年10月連合副会長(現職)。05年  
10月IMF-JC議長(現職)